「義仲論」（芥川龍之介）試論

――高山樗牛、山路愛山との関連から――

堀竹忠晃

一、芥川龍之介の義仲観

芥川龍之介は源義仲をどのように見ていたのか。まず大きく二点に分けて考えてみたい。一つは義仲の政治的施策、すなわち芥川の言葉を借りるならば、義仲の「経綸」の方面であり、他の一つは彼の人間性（性格）である。

まず芥川は義仲の経綸については、「革命」の「英雄児」として捉え、さらに人間的な面では、義仲を「自由の寵児」と見なしていた。

(1)革命の英雄児としての義仲

芥川の「義仲論」は三部構成から成り立っている。(一)は「平氏政府」について、(二)は「革命軍」、(三)は「最後」という部立てである。義仲は、(二)の「革命軍」の中程から登場し、「将門、将を出すと云へるが如く、我が木曾義仲も亦、将門の出なりき」[1]と彼の出自を語るところから始まる。芥川が義仲を語るに際して、義仲を取りまく当時の歴史状況――政治的、経済的、軍事的――の叙述は、よくまとまっており、相当に正確な歴史的認識であったことが知られる。これは芥川が『平家物語』や『源平盛衰記』などをよく読み込んでいたことを示すだけではなく、「義仲論」執筆の背後に、山路愛山という民間の歴史家がいたという存在を抜きにしては考えられないのである。このことに関しては後程に詳述するつもりである。

ところで芥川が「義仲論」で問題にする「革命軍」という意味について考えたい。

結論的に言うならば、治承・寿永の内乱期において、藤原氏を頂点とする旧王朝宮廷勢力に対して、対抗し改革を試みようとすることと規定できよう。清盛の平氏政権、鎌倉の頼朝の武士政権も芥川流にいえば、革命政権である。たとえば、芥川は頼朝の革命政権について次のように述べている。

寿永革命史中、経世的手腕ある建設的革命家としての標式は、吾人之を独り源兵衛佐頼朝に見る。彼が朝家に処し、平

氏に処し、諸国の豪族に処し、南都北嶺に処し、守護地頭の設置に処し、鎌倉幕府の建設に処するを見る……（三　最後）

頼朝はこのように「経世的手腕ある建設的革命家」なのである。これに対して義仲は頼朝と異なり、「破壊的」革命家である。

彼は遂に時勢の児也。鬱勃たる革命的精神が、其最も高潮に達したる時代の大なる権化也。破壊的政策は彼が畢生の経綸にして……（三　最後）

さらに芥川は義仲が寿永革命史上で「一頭地を抽く所以のもの」として、義仲が「飽く迄も破壊的に無意義なる縄墨と習慣とを蹂躙して顧みざる」ところにあるとしている。芥川のいう「無意義なる縄墨と習慣」とは、京都の公家社会、先例と故実が蔓延せる宮廷でのことをいう。

その王朝社会に対して、真っ向から戦いを挑んだのが義仲であった。芥川自身頼朝と義仲の経綸の相違、あるいは両者の性格の相違を正確に認識している。

頼朝は「飽く迄も打算的に飽く迄も組織的に、天下の事を断ずる」、義仲は「其実行に関らず、唯其期する所を行はむと欲せし也」という。したがってたとえば、義仲が後白河法皇に戦いを挑む法住寺合戦は、頼朝にあっては「如何なる死地に陥るも、法住寺殿の変はなさゞりしならむ」という。彼義仲にとって、皇室も藤原氏も、また故実も先例も、彼の意に沿わないものは、まさしく破壊の対象であったし、また時の権威や権力も恐れるに足るものではなかった。

ところで芥川は義仲は勿論、頼朝に対しても、「革命」という言葉を冠しているが、いったいこの言葉の適否はどうなのか。たとえば現代の歴史界で、頼朝や義仲を革命家と呼ぶであろうか。治承・寿永の内乱も変革期と呼称されるけれども、革命期とは言わない。では、これら一連の「革命」の呼称は芥川独自の語彙感覚によるものなのか。実は私はその背後に山路愛山の影響があると考えるものである。山路愛山は彼の著書『源頼朝』の「源義仲論」（一九）で、「彼は旧き時代を破壊すべき使命を帯びて世に生まれたるものにして其使命を果たすに於ては殆んど遺憾なきものなりき」と述べている。「旧き時代を破壊すべき」と述べていることと、芥川が義仲を「革命家」と呼ぶこととは、いずれも五十歩百歩の違いがあるだけでそれほど違和感はない。愛山は『源頼朝』の中で、義仲を「革命家」と呼称したことは一度もない。しかし、愛山は松本新八郎によると、「革命」という言葉を通常の解釈と相違して使用していたという。松本新八郎は愛山著『足利尊氏』（岩波文庫）の解説で、愛山の「革命」について次のようにいう。

革命は人民の力によって権力を支配階級から奪うことにあるはずである。ところが愛山における革命は人民によるたんなる政府の転覆にすぎなかった。

(2) 自由の寵児としての義仲

芥川のいう革命児としての義仲は、義仲固有の性格と不可分の関係にあり、自分が欲したところ、思ったところを即座に実行す

る奔放不羈なる自由さがあった。

芥川は義仲の法住寺殿攻撃にふれて、彼の革命的健児たるの所以をその性格の奔放不羈な自由さにあると見なしている。

彼が法皇のクーデターを聞くや、彼は「北国の雪をはらうて京へ上りしより一度も敵に後を見せず、仮令十善の君にましますとも甲を脱ぎ弓の弦をはづして降人にはえこそまゐるまじけれ」と絶叫したり。（中略）彼は、其実行に関らず、唯其期する所を行はむと欲せし也。是豈彼が一身を顧みざるの所以、彼が革命の使命を帯びたる健児たるの所以……（三　最後、傍線―堀竹）

また、彼義仲の自由奔放なる性格は、あらかじめ利害得失、成敗利鈍を顧みないものであった。その点でも頼朝と異なったのである。

頼朝は殆ど予期と実行と一致したり。順潮にあらずンば軽舟を浮べざりき。然れども義仲は成敗利鈍を顧みざりき。利害得失を計らざりき。彼は塗墻に馬を乗り懸くるをも辞せざりき。かくして彼は相として敗れたり。而して彼が一方に於て相たるの器にあらざると共に、他方に於て将たるの材を具へたるは、即ち義仲の義仲たる所以、彼が革命の健児中の革命の健児たる所以にあらずや。（三　最後）

義仲の自由奔放な性格と関連して、芥川の指摘する義仲の性格は以下の通りである。

・彼は赤誠の人也。彼は熱情の人也。
・彼は小児の心を持てる大人也。
・彼は野生の児也。
・彼は唯直情径行……
・彼は情熱の愛児也。

そして最後に芥川は最終的に義仲の生涯を次のような言葉で締めくくる。芥川の義仲に対する思いは次の文章にすべて表明されているのではなかろうか。

彼の粟津に敗死するや。年僅に三十一歳。（中略）しかも彼は其炎々たる革命的精神と不屈不絆の野生とを以て、個性の自由を求め、新時代の光明を求め、人生に与ふるに新なる意義と新なる光栄とを以てしたり。彼の一生は失敗の一生也。彼の歴史は蹉跌の歴史也。彼の一代は薄幸の一代也。然れども彼の生涯は男らしき生涯也。（傍点―芥川）

二、高山樗牛――「清盛論」を中心として

芥川が若き日に高山樗牛の著書に親しんだのは、つとに芥川のよく語るところである。たとえば芥川が大正八年（一九一九）一月一日発行の雑誌「人文」第四巻第一号（岩波書店　芥川龍之介全集　第四巻、一九九六所収）に掲載された「樗牛の事」には、芥川と樗牛との関わりが次のように述べられている。

中学の三年の時だつた。三学期の試験をすませた後で、休暇中読む本を買ひつけの本屋から、何冊だか取りよせた事がある。夏目先生の虞美人草なども、その時その中に交つてゐ

たかと思ふ。が、中でも一番大部だつたのは、樗牛全集の五冊だつた。

自分はその頃から非常な濫読家だつたから、一週間の休暇の間に、それらの本を手に任せて読み飛した。勿論樗牛全集の一巻、二巻、四巻などは、読みは読んでもむづかしくつて、よく理屈がのみこめなかつたのに違ひない。が、三巻や五巻などは、相当の興味を以て、しまひまで読み通す事が出来たやうに記憶する。(以下略)

さて、さきに芥川の語つた樗牛全集の第三巻に「平相国」「平家雑感」の記事があり、後年芥川が「義仲論」をものした時、樗牛の「平相国」(明治三十四年(一九〇一)、中でも最後の章「清盛論」(一二)は、芥川に影響を与えたのではないかと思われる。

樗牛に関しては、今更紹介する必要もない程であるが、明治中期の代表的ジャーナリストであり、大学在学中に読売新聞懸賞小説に応募して、「滝口入道」で一等に入選したのはあまりにも有名である。

芥川がさきに語った「相当の興味を以て、しまひまで読み通す事が出来た」樗牛全集の第三巻を見ると、歴史上の人物伝が多く取り上げられている。釈迦、ナポレオン三世、ジャンヌ・ダルク、日蓮上人らである。「平相国」は勿論第三巻にあるのは、さきにも述べた。樗牛がこのように歴史上の偉人を取り上げたこと自体、樗牛のニーチェによる超人主義を物語るものであろうか。

ニーツエは、更に論歩を進めて民主々義と社会主義とを一撃の下に破砕し、揚言して曰く、人道の目的は衆庶平等の利福に存ぜずして、却て少数なる模範的人物の産出に在り。是の如き模範的人物は即ち天才也。神人也。(高山林次郎「文明批評家としての文学者」、『近代評論集Ⅰ、日本近代文学大系57』)

樗牛はいう。世に清盛を評する者は、「其の狂悖暴戻を言はざるは無し」[2]と。しかし、それは清盛を理解しないところから発するものであり、清盛は「天真爛熳」、おのれの欲するがままに行動する「我執の人」なのである。つまり「自我の満足、是れ彼れにとりて最上の道義たりき」という。常識論からすれば、清盛のなしたる行動は「狂悖」であり、「暴戻」であり、また、朝廷に対しては「不忠の臣」を免れるものではない。しかし、彼は「当代の倫理を超越したる一巨漢」であり、「善人にもあらず、悪人にもあらず、唯々一個の巨人、一個の快男児」に過ぎなかったという。そして樗牛は清盛の死を「大なり」と言い、清盛の生を「大なり」と言うのである。

この樗牛が清盛を評するのに用いた論法(観点)——清盛を善でもなければ、悪でもない、当代の倫理を越えた者とする規定(超人主義)は、芥川の「義仲論」にもそのまま通用する。芥川の義仲評を見てみよう。

当代の道義を超越したる唯一個の巨人也。(三 最後)

清盛と義仲、両者は出自を異にし、生い立ちも環境的条件も全く異にするが、不思議に性格的に似通ったところがある。その性

格の同一性により芥川が義仲を論文に選定した時、樗牛の「清盛論」は参考になったと思われる。

樗牛は清盛をかく評する。

一言すれば大人にして、尚ほ小児の心を失はざるものなりき。

芥川は義仲をかく評する。

彼は小児の心を持てる大人也、怒れば叫び、悲めば泣く、彼は実に善を知らざると共に悪をも亦知らざりし也。（三　最後）

三、山路愛山――『源頼朝』から

私的なことで恐縮だが、私は去年ある会合で、芥川の「義仲論」を『平家物語』との関連で発表したことがある。その時私は芥川の「義仲論」のベースに山路愛山の『源頼朝』の影響があることを指摘した。芥川が「義仲論」を執筆する際に、愛山の『源頼朝』が座右の書として使用されたことへの言及は、私が最初の発見者であるかのように、芥川の研究に関して、全くの素人である私は誤解していたのである。その後、芥川の研究文献を読み進むにつれて、既に愛山との関わりについて指摘されていることを私は知った。なんとも不明の致すところで、汗顔の至りだが、一応この誌面を借りて私の失敗談を述べておく。

さて、私は最近清水康次氏の論文「「野性」の系譜」を拝読した。その論文には、芥川の「義仲論」と愛山との関連が述べられていたのである。氏の論文は「国語国文」第58巻2号、平成元年（一九八九）二月に発表されたものだが、私は氏の論文を有精堂の『日本文学研究資料新集19　芥川龍之介』（理知と抒情、宮坂覺編、一九九三年六月刊）で知った。

『芥川龍之介事典』（増補版、菊池弘、久保田芳太郎、関口安義編、平成一三年版（二〇〇〇）、初版昭和六〇年（一九八五）、明治書院）の「義仲論」の項には参考文献として臼井吉見の「「木曾義仲論」をめぐって」（『現代日本文学大系43　芥川龍之介集』筑摩書房　一九六八・八）と伊豆利彦氏の「芥川文学の原点――初期文章の世界――」（「日本文学」一九七三・七）の二編しか載せていず、清水氏の上記の論文は割愛されていた。臼井や伊豆氏の論文も芥川の「義仲論」を考える時、重要な参考文献であるが、清水氏の論文も「義仲論」の典拠を指摘した点で重要だと思う。

芥川の「義仲論」の出典を最初に指摘した研究者が清水氏かどうかは、私は不勉強でまだ分からないが、氏の論文を拝読する限りはそう言えるだろう。

清水氏も述べているように「典拠となった文章の存在を過大に考える必要はない」ということはその通りであろう。しかし、私は芥川の「義仲論」考察するとき、やはり典拠である愛山の『源頼朝』との関連の指摘は不可欠であると思う。その点に関しては、追い追いと述べていくつもりである。

さて、愛山の『源頼朝』について書誌的なことを述べると、同書は明治四十二年（一九〇九）七月に、玄黄社より『源頼朝』（『時代代表日本英雄伝』第五巻）として発刊されている。今私は、上

記の著書を底本として復刊された東洋文庫四七七の『源頼朝』を参考資料として見ていきたい。

歴史家福田豊彦氏は同書の解説で次のように述べている。

……本書は、山路愛山の数多くの著作の中でも、最も優れた作品である。

さらに氏は続けて次のようにいう。

「模範的日本人」を通じて「一貫したる日本歴史」を書こうとした本書は、単なる『人物伝　源頼朝』ではない。それは頼朝の本書への初登場が第十章、全体の三分の一を終えた後であり、彼の活躍は後半の四章分に限られることをみても明らかであろう。そして本書は、この「源頼朝」登場以前においても勝れており、八十年後の今日の歴史研究に新たな示唆を与えてくれるものも多い。

ところで『源頼朝』の各章毎の表題は以下の通りである。

第一章　東北の日本と西南の日本
第二章　諸国住人とは何ぞや
第三章　源氏の勃興
第四章　藤原氏と源氏
第五章　院政論
第六章　源平両立の時代
第七章　保元の乱
第八章　文学の興隆及び信仰の変化
第九章　平治の乱
第十章　平氏執権の時代
第十一章　平氏の衰運
第十二章　平氏の滅亡
第十三章　頼朝義経の不和及び奥州征伐
第十四章　政治家としての源頼朝
第十五章　源頼朝は如何なる人ぞ

この中で芥川が「義仲論」を執筆する際に参考にした記事内容は、第十章「平氏執権の時代」から第十二章「平氏の滅亡」に至るまでである。とくに第十二章中の「源義仲論（一九）」は、芥川にとって大いに参考になったのではないかと思われる。愛山の「源義仲論」を今要約してみると、次の九点程であろうか。

(1) 義仲は藤原氏政治の圧迫に対する反抗の権化である。
(2) 彼は田舎漢であり、野人である。
(3) 彼は行雲のごとく、流水の如く動けるのみであった。
(4) 彼は直情径行であった。
(5) 彼は当時の貴族、朝紳が生命より大切にした意義なき縄墨、死せる儀仗に従順ではなかった。
(6) 彼は皇室に対して、尊崇の念が劣っていたわけではなかった。
(7) 叔父義弘、行家を保護し、背くことなく、頼朝との戦いを避けたのも彼の美質であった。
(8) 彼にとって拙劣の極みは、糧食に窮して自保の手段をとったことであった。
(9) 彼は旧き時代を破壊すべき使命を帯びて世に生まれたので

ある。

愛山の右の義仲論は、芥川の義仲論とよく類似していることは、私が先の一の「芥川龍之介の義仲観」で述べたところからも、ある程度了解できるのではなかろうか。

次に芥川の「義仲論」と愛山の『源頼朝』との表現上での類似点を指摘したい。

(1)平氏の西国経営

芥川――入道相国の烱眼は、瀬戸内海の海権を収めて、四国九州の勢力を福原に集中するの急務なるを察せしなれ。(一　平氏政府)

愛山――伊勢平氏の功を立てたるは西国に在り……瀬戸内海の海権を掌り、四国九州の勢力を福原に集中して以て天下に臨む……(第十二章　平氏の滅亡(一)東国の状態)

西国経営について、芥川は「入道相国の烱眼」と言い、愛山は「伊勢平氏の功」と言い、字句上の相違はあるが、内容は同じことを述べている。

(2)福原遷都

芥川――請ふ吾人をして福原の遷都を語らしめよ。何となれば此一挙は、入道相国が政治家としての長所と短所とを、最も遺憾なく現したれば也。(二　革命軍)

愛山――桓武天皇の遷都以来四百年に及びたる帝都の歴史を無視し一朝にして之を他に移さんとす(中略)清盛の政治家たる長所と短所とは最も善く此一挙に現はれたり。(第十二章　平氏の滅亡(五)近畿の騒擾。平氏の狼狽。附福原遷都及び園城寺南都の兵燹)

福原遷都について、清盛の長所と短所とを指摘したこと、このことについては両者ともぴたりと一致する。芥川は清盛の長所として「彼が政治家としての長所は、実に唯此大所を見るの明に存したりき」という。一方愛山は、「彼は如何なる場合に於ても大所を見るの明ありき」という。大所の明という点で両者は共通している。

では具体的にどういうことについて「大所の明」といっているのか。

芥川は「彼は瀬戸内海の海権に留意し、其咽喉たる福原を以て政権の中心とするの得策なるを知れり」と。愛山は、「彼が瀬戸内海の海権に注意し、其咽喉の地を以て政治の中心とせんとしたること」と。両者は言葉遣いまでが類似している。

では、清盛の短所についてはどうか。芥川はこれについては何度も同じようなことを繰り返しているが、要するに次のようなことであろうか。

彼は其目的を行はむには、余りに其手段を選ばざりき。余りに輿論を重んぜざりき。余りに、単刀直入にすぎたりき。

愛山はこれに対して次のようにいう。

されど彼は其新案を実行せんとするに於て余りに急激なりき。余りに輿論を無視したりき。余りに直情径行なりき。

字句上の相違はあるものの、言わんとするところはまったく同一といってよい。

(3)宗盛は不肖の子

芥川――宗盛次いで立つ。然れども彼は不肖の子なりき。彼は経世的手腕と眼孔とに於ては殆んど乃父浄海の足下にも及ぶ能はざりき。彼は興福東大両寺の荘園を還附し、宣旨を以て三十五ヶ国に課し興福寺の修造を命ぜしめしが如き、仏に佞し僧に諛ひ、平門の威武を墜さしむる、是より大なるは非ず。(二　革命軍)

山路――彼に継ぎて平氏の家督たりし宗盛は其人物識見に於て固より不肖の子と云ふべきものなりき。(中略)彼は其父が園城寺及び南都を火きて不人望となりしを知れるが故に清盛の歿後間もなく嘗て収公したる東大寺、興福寺の荘園を二寺に還附し、嘗て奪ひたる二寺僧綱の官を復し、尋て六月十五日に至りて宣旨を以て三十五国に課し興福寺の修造を命じたり。(第十二章　平氏の滅亡(六)平清盛歿す。平氏の財政難)

芥川、山路とも清盛の後継ぎの宗盛を「不肖の子」と呼ぶのは異論はない。もっとも宗盛が不肖の子であったり、嫡子重盛に比較して格段に劣った人物であると見做されているのは、原典である『平家物語』『源平盛衰記』以来のことであるから不思議はない。ただ問題は不肖の子の具体的理由である。その具体例を芥川、愛山ともに共通して興福寺、東大寺修造及び荘園の還付に置いている点である。芥川に至っては、それが「仏に佞し僧に諛」った云々としているが、実は愛山も同様のことを述べているのは、次からも了解されよう。

今や宗盛の世に至りて連りに南都の機嫌を取り、其父の放火したる二寺の修造に従事す。是豈僧徒を驕らし世人の迷信に口実を与へ、併せて平氏の威信を失はしむるものに非ずや……(第十二章　平氏の滅亡(六)平清盛歿す。平氏の財政難)

ところで、治承五年(養和元年、一一八一)六月十五日の宣旨で、三十五か国に課して興福寺の修造を命じたとすることについては、愛山もいうように藤原兼実の日記『玉葉』の同日の記事に見えるものである。しかし、日記の筆者の兼実はこれについては何等の感想や意見も、つけ加えていない。単に宣旨の内容を記すのみである。

宗盛を「不肖の子」と述べ、その具体的理由を南都の東大寺や興福寺の還付、さらに諸国に興福寺の修造を命じた宣旨で示し、最後にそれについて感想や意見を述べることで、宗盛を批難する

言辞は、芥川、愛山とも単なる偶然の一致とは思えない。やはり愛山から芥川への影響関係を指摘せざるを得ない。

(4)平氏の財政窮乏

芥川――此時に於て平氏に致命の打撃を与へたるは、実に其財政難なりき。(中略)平氏が使者を伊勢の神三郡に遣りて、兵糧米を充課したるが如き。はた、平貞能の九州に下りて、徭を重うし、賦を繁うし、四方の怨嗟を招きしが如き、是、平氏の財力の既に窮したるを表すものにあらずや。(一 革命軍)

山路――且当時平氏の患は実に財力の窮乏に在り。何の世に於ても得意の境界に在るものは却て其驕奢の為めに財力の窮乏を来たすを常とす。是時に方りて平氏が使者を伊勢の神三郡(大神宮鎮座の地なり)に入れ兵糧米を充課し、民烟を追捕し、世人をして天照大神鎮座以後千百余歳未だ嘗て此の如き例あらずと言はしめしが如き、(中略)平貞能の鎮西に下るや使者を派して荘園、社寺に遣り誅求峻急なりしが為めに大に九州の人望を失ひしが如き……(第十二章 平氏の滅亡(六)平清盛歿す。平氏の財政難)

このことに関しては、『吾妻鏡』の治承五年正月二十一日の記事に見えるのがそれである。

平相国禅門驕奢の余り、朝政を蔑如し、神威を勿緒し、仏法を破滅し、人庶を悩乱す。近くはすなはち使者を伊勢国神三郡(大神宮御鎮座)に放ち入れ、兵粮米を充て課せ、民烟を追捕す。天照太神鎮座より以降千百余歳、いまだかくのごとき例あらずと云々。[3]

また平貞能の鎮西下りについては、『吾妻鏡』の養和二年(一一八二)四月十一日の条にあるものである。

貞能、平家の使者として、この間鎮西にあり。しかるに官使を申し下し、数輩の私使を相副へ、兵糧米と称して国郡を廻り、水火の責めをなす。庶民ことごとくもってこれがために費ゆ。(以下略)

まず『吾妻鏡』の治承五年正月二十一日の記事に関しては、使者を伊勢三郡に入れたことについて、清盛の「驕奢の余り」の横暴な行為であって財政難故の行為とは書かれてはいない。また、『吾妻鏡』の養和二年の記事については、事実のみを記載しているだけで、なぜ貞能がそのような行為に及んだかについては述べていない。いずれにしても兵糧米を徴収したことは、平氏側がそれだけ財政上逼迫していたことを現すものであったとしても、芥川と愛山とが「財政難」として、年月の異なる両方の記事を一纏めにしていることは、やはり愛山から芥川への影響関係を考えた方がよいのではあるまいか。

(5)旧習・旧弊の打破

芥川――彼が寿永革命史上に一頭地を抽く所以のものは、要

するに彼は飽く迄も破壊的に無意義なる縄墨と習慣とを蹂躙して顧みざるが故にあらずや。（三　最後）

山路――彼の蒙りたる非難は……当時の貴族、朝紳が生命よりも大切にしたる、意義なき縄墨、死せる儀文に従順ならざりしが為めのみ。（第十二章　平氏の滅亡（一九）源義仲論）

両者同一のことを言っていることは今までと同じである。

さて、以上芥川と愛山の歴史的叙述について、基本的に類似する内容を指摘した。

四、芥川龍之介「義仲論」をどう読むか

(1) ひとつの不思議

芥川の「義仲論」を考える時、高山樗牛の「清盛論」、さらには山路愛山の『源頼朝』の影響は隠れもない事実であることは、さきにも述べた通りである。とくに愛山の「源頼朝」は芥川にとって座右の書であり、彼が「義仲論」を執筆する際には、なくてかなわぬ著書であったはずである。

ところで、ここにひとつの不思議がある。それは芥川が愛山については一言も言及しないことである。芥川は後年彼が影響をうけた書物や人物、また若い頃の読書遍歴、あるいは彼が創作また は著作した作品について、彼がベースにした出典等をいろいろと語りかけるが、愛山について、またその著作については一言も語らない。管見の及ぶ限りはそうである。[4] これはどういうことか。ひとつの疑問である。

たとえば「私の文壇に出るまで」（「文章倶楽部」第二年第八号、芥川龍之介全集　第二巻（岩波書店、一九九五）所収）に次のような記事がある。

私は十位の時から、英語と漢学を習つた。高等小学の三年から第三中学に入つた。恰度上級には後藤末雄、久保田萬太郎の両氏があつた。私は大層温和しかつた。そして書くことは好きであつたけれども、五年の時に唯一度学校の雑誌に『義仲論』といふ論文を出したきりで、将来は歴史家にならうと思つてゐた。（以下略）

芥川は「義仲論」を中学校の雑誌に発表したことを語るが、愛山については何等触れることはない。この文の後で、彼は小学校時代、中学校時代、高校、大学時代の読書傾向を具体的に語っているが、愛山の名は残念ながら見当らない。

次に「小説を書き出したのは友人の煽動に負ふ所が多い――出世作を出すまで――」（「新潮」第三十巻第一号、芥川龍之介全集第四巻（岩波書店、一九九六）所収）に「義仲論」について述べている。その前後の文章を示すと次のようである。

小学校に通つてゐる頃、私の近所にあつた貸本屋の高い棚に、講釈の本などが沢山並んでゐた。それを何時の間にか端から端迄すつかり読み尽してしまつた。やがて、さうしたも

のから導かれて、まづ「八犬伝」を読み、「西遊記」「水滸伝」を読み、馬琴のもの、三馬のもの、一九のもの、近松のものを読み始めた。傍ら十歳位の時から始めてゐた英語と漢学とを習つた。徳富蘆花の「思ひ出の記」や「自然と人生」を、高等小学一年の時に読んだ。中学時代には、泉鏡花のものに没頭して、それを悉く読んだ。漢詩も可成り読んだ。続いて夏目さんのもの、森さんのものも大抵皆読んでゐる。中学の五年の時に「義仲論」といふ論文を校友会雑誌に出した。これが一番始めに書いて出して見た文章であつた。（以下略）

ここにも徳富蘆花、泉鏡花、夏目漱石、森鷗外等の名前が出てくるが、愛山の名前は出てこない。

愛山は明治期に活躍した史論家、評論家であり、『源頼朝』は当時多くの読者層を獲得したと言われている。芥川がかく沈黙を守る理由はなぜなのか。今のところ私には不明である。

（2）「義仲論」をどう評価するか

①芥川自身相当な程度の歴史認識を示している。

②しかし、それは愛山の『源頼朝』の内容を、芥川が十分に理解し、学習していたことを示しており、学力的に優秀な秀才の論文と言える。

③義仲をめぐる歴史的認識に関しては、大方の点で愛山の『源頼朝』の影響は大である。その点で独創性に欠ける恨みがある。

④しかし、芥川が木曾の自然に注目し、それを義仲の革命の覇気と結びつけたことは、まさしく芥川の独創であり、愛山にはないことで、芥川のひとつの発見といってよい。

⑤芥川の義仲に対する強烈な思いが行間に溢れている。それが義仲を描く際、義仲の人間的側面に傾斜することになったのかも知れない。

①について、臼井吉見は例の「「木曾義仲論」をめぐって」で、芥川の「義仲論」を賛嘆して次のようにいう。

漢文と歴史の学力の綜合を示すものとして、まさに瞠目に価する。史眼、立論、文章、全体の布置結構――これが中学生の筆に成るものと誰が信ずることができようか。

まったく文句なしの絶賛であるが、愛山のよき学習者、理解者としての芥川の論文であれば、臼井がかく絶賛するのも不思議ではない。

③については、さき程の清水康次氏の論文に『「義仲論」の内容には、独創的な部分は少ない」とあり、また吉田精一は著書『芥川龍之介Ⅰ』（吉田精一著作集　桜楓社　一九七九・十一）に「義仲論」について、次のように述べている。

文章としては谷崎潤一郎の中学時代の作品のような天才的な光彩は発見出来ない。たゞ比較的自由に漢語を駆使し得ていることと、歴史的事実の細かい点迄通暁している点は、注目すべきである。（四、中学時代）

芥川の文章を谷崎潤一郎と比較して、「天才的な光彩は発見出

来ない」とあるが、それは芥川の論文の独創性に欠けることを指摘したものと見てもよいのではなかろうか。

④に関しては、少年芥川の独創性を示すものとして、大いに評価したい。このことに関しては、伊豆氏が例の「芥川文学の原点——初期文章の世界——」で指摘している。また氏は明治四十二年（一九〇九）の夏に、芥川が槍ヶ岳登山をした体験と重ねて論じている。注目すべきことと思う。

⑤の「人間的側面に傾斜する」とはさきの清水康次氏の論文に「ひたすら義仲の人間性の問題に重心を置いている」とある発言に賛成して、私流に言い換えたものである。

(3) 芥川が「義仲論」で求めたもの

私はここで再度臼井吉見及び伊豆利彦氏の論文を取り上げる。

臼井吉見は「「木曾義仲論」をめぐって」で、芥川が義仲に何を求めたのかを次のように述べている。

> 彼自身の周囲に充満していたものが、江戸的、下町的なものだったればこそ、それに反発して、義仲的なものを求めずにはおられなかったのではないだろうか。

として、「原始的な心」「蛮気とも云ふべきもの」こそ芥川が「本来求めてやまなかったものである」と述べている。「或阿呆の一生」に、「凄まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかつた」とあるところを引用し、臼井は芥川が「生涯を通じてそれを求め、ついに得られなかった悲鳴のごときものを聞き取ることもできるのではないか」という。

さらに伊豆利彦氏は例の「芥川文学の原点——初期文章の世界——」で、臼井吉見が芥川のいう「革命の健児」という「革命」の言葉を脱落させて、「義仲論」を論じたと批判し、「「義仲論」を貫くものは、「革命的精神」の謳歌であり、讃美であり、憧憬であった」とする。

さらに氏は続ける。

> 芥川をして「義仲論」を書かせたものは、革命をおもう熱い心である。芥川は客観的な歴史の叙述を目ざし、正しい史実の解釈を目ざしたのではない。源平合戦を借りて革命の夢を語り、木曽義仲に自分の夢みる革命の健児を描き出した。

さて、先の臼井の論文の前半にいう「江戸町、下町的なもの」に対する芥川の反発は、必ずしもそうとは限らず、反発しつつも愛着している面があり、全面的に賛成することはできない。後半に関しては、つまり「原始的な心」「蛮気とも云ふべきもの」に対する強烈な思いはまったく私も同感である。

一方、伊豆氏の「革命」をめぐる意見だが、芥川が義仲の時代を「革命」と位置づけたこと自体、たとえそれが愛山の示唆をうけたとはいうものの、一点の疑義は残る。また、芥川がどこまで社会革命を思っていたかどうかは疑問を感じている。伊豆氏のいう芥川の初期の作品「日光小品」の「クロポトキン」云々の問題はあるにせよである。私は伊豆氏の革命説には、まだそのままにはのめり込んでいけないでいる。

では芥川は義仲を論ずることで何を語りたかったのか。

それは芥川を取り囲む周囲の現実――家庭、学校社会、友人、人間関係等々、それらは人間の自由を拘束し、束縛する――を義仲的な力（生命力）を借りて破壊してみたいという激烈な思いではなかったか。破壊の対象はある特定の対象ではなく、人間的自由を奪うものならばあらゆるものが、破壊や攻撃の対象となったのである。

また、破壊と同様に芥川には、義仲に対する強烈な憧れがあった。彼義仲が積極的に人生を生き、いや生きているというよりも、生命力そのもの、原始的なまでの強烈な火花を有する精神と肉体を横溢させて、一時代を男らしく生きた義仲の一生こそ、芥川が憧れて止まないものであった。そして義仲の生を憧れの生として、自分の周囲の現実を見回した時、ますます義仲の生が憧憬されてきたのではなかったか。

最後に付け加えたい。この「義仲論」は義仲を通して、少年芥川の人生の夢を語りたかったのである。そしてそれこそが、「義仲論」の成立動機ではなかったかと思う。

注

（1）芥川龍之介の「義仲論」の本文は、岩波書店の芥川龍之介全集　第二十一巻（一九九七）によった。初出は東京府立第三中学校「学友会雑誌」第一五号（一九一〇・二）である。

（2）樗牛の「清盛論」は樗牛全集・第三巻（大正四年（一九一五）四月刊、博文館）によった。

（3）『全訳吾妻鏡』（一九七六・一〇　新人物往来社）による。以下本文中の『吾妻鏡』の記事は上記によった。

（4）ただ芥川の書簡集に葛巻義敏様宛として、大正十五年（一九二六）四月二十三日付けの絵葉書に「又カラカミの本棚の一番上の段に山路愛山著孔子論……」（芥川龍之介全集　第二十巻、岩波書店、一九九七）とあり、それらの書物を送るように指示しているのが、唯一愛山について記したものである。

（ほりたけ・ただあき　本学非常勤講師）